

女子大國文

第百六十二号

平成三十年一月発行

彙

報

(五二)

山部赤人「登神岳」歌の主題

池原陽斉(三二)

秋成文藝の魅力―小説・和歌・俳諧―

近衛典子(一一)

二〇一七年度公開講座

京都女子大学国文学会

女子大國文

第百六十二号

平成三十年一月発行

京都女子大学国文学会

女子大國文

第百六十二号

平成三十年一月十五日 印刷
平成三十年一月三十一日 発行

〒605-8501 京都市東山区今熊野北日吉町三番地
編輯兼
発行者 京都女子大学国文学会

電話 〇五十一五三一九〇七六
FAX 〇五十一五三一九一二〇
振替 〇〇〇一五一一三四

〒605-8501 京都市上京区上長者町通黒門東入
印刷所 西村印刷株式会社

電話 〇五十四一四一〇八代
FAX 〇五十四一六二八二

彙報

○女子大國文第一六二号をお届けします。

○国文学科新入生歓迎行事「能楽鑑賞会」、秋季公開講座、および国文学会旅行の感想文を掲載しました。

研究室だより

○本学科教授をお務めになりました濱川勝彦先生が逝去されました。謹んで御冥福をお祈り申し上げます。

二〇一七年度国文学会行事（後期）

○秋季公開講座（大学と共催）

十月十六日（月）午後二時四十五分より 於J四二〇教室

講題 秋成文藝の魅力——小説・和歌・俳諧——

講師 駒澤大学 近衛典子先生

○学会旅行

十一月十二日（日）に、学科主任・運営委員の先生方と九名の学生が参加し、奈良の散策を行いました。

【国文学科新入生歓迎行事「能楽鑑賞会」鑑賞の記】

（六月十七日）

現代まで続く能楽の本当の面白さ

一回生 麻生 いちご

初めて生で能楽を鑑賞させていただいた。古典芸能が本当に面白く、奥深いものであると気付くことができた、良い体験であった。本当に、能楽を鑑賞したことがない人は、もったいないと思う。私は芸術鑑賞をするのがとても好きで、バレエやミュージカルをよく鑑賞しに行くが、能楽はそれらと並ぶくらいの舞台芸術で、お金をしっかり払って鑑賞したいと思った。古典芸能はどうしても、昔の人たちが好んだ娯楽というイメージで、難しそうだと勝手に思い込んでいる人が多いと思う。私もその一人だったが、一度鑑賞すれば、その勝手な思い込みがすぐに吹き飛ぶはずだ。今回は、能や狂言についてのお話や着付、小鼓・大鼓体験などもあったからかもしれないが、能楽に対する壁のようなものがなくなつたような気がする。プロの人が来て下さったことも本当にありがたいことだと思った。

お話をして下さった河村さんが、「十四世紀から現代まで残っている」ということは、能楽が本当に面白く、価値あるものだと

人々が感じたからだ。」と話されたのを聞いて、その通りだと、私の心の中にその言葉がストンと落ちた。現代まで残されているという事実が、能楽が人々に受け入れられているということを物語っているのだ。

能の動作は一つ一つに無駄がない。同じ動きでも、意味や表現が込められれば、全て異なる動きに見える。単純だからこそその美しさや、表現方法なのだと知った。狂言でも同じだ。「型」というものがあり、一つ一つの動作は全て、決まったものであるが、だからといって、全部の動きが意味が違っただけで同じには見えない。逆に、同じ意味の動きは寸分の狂いもなく同じにしか見えない。また、狂言では、物を使っていないのにあるように見えたのも、とても不思議で、本当に自然にそこに物があるように見えて、改めて凄いと感じた。狂言は能と能の間の、今という休憩の時間に舞台に出てきていたらしい。観客を笑わせ楽しませることで、疲れを忘れさせる役目があったそうだ。

百聞は一見に如かずという諺があるが、能楽は本当にこの通りだ。とにかく一度鑑賞してみてほしい。能楽の魅力に気づくだろう。私は今回の鑑賞会が終わった後、母と妹に能楽と一緒に鑑賞しに行こうと誘った。是非、多くの人に、特に、古典芸能は難しそうと思っている人に能楽の本当の面白さ、楽しさを知ってほし

いと思う。そうすることでまた、古典芸能が後世の人はずっと受け継がれていくことになると思う。私たちが生きている時代まで、しっかりと受け継いでくれた人々のように、私たちも後世の人々に残していかなければならないと今回の能楽鑑賞を終えて、強く思った。多くの人が、私たちのように能楽に対する気持ちや考えが良い方に変わってほしい。

【秋季公開講座聴講記】（十月十六日）

秋の公開講座に参加して

三回生 渡 辺 和

私は今まで上田秋成という人物について『雨月物語』『春雨物語』の作者であるということぐらいしか知りませんでした。しかし駒沢大学近衛典子教授の講義により、上田秋成という人物への印象が大きく変わりました。

今回の公開講座は『上田秋成の魅力——小説・和歌・俳諧——』というタイトルで講義していただきました。様々な視点から上田秋成について考える講義であり、私は多くの秋成の魅力を知ることができました。

和歌という視点では、小沢蘆庵とのやり取りのエピソードが印象的でした。

すきまかせ身にしむ老の末のやまこす月なみもしはしとそなる

という蘆庵からの和歌が折句で「すみすこし」となっていることに気が付かず、折句が使われていない返歌を送ってしまったことを後悔し、後に

（前略）けふまた聞こえばうたておぼすらんとて、此れう紙、比ごろの手すさび也。見せ参らす。御心とどまらば又も奉らん。名はふとしもつけたる也（大徳寺寸松院什物、貫之料紙懷紙、名、青雲紙色紙、七枚来〔頭書〕）

瀬は渚といく度かはる憂き身かなむかしをのみもしのぶなみだに

と書かれた手紙を送っています。この和歌は折句により「せいむし」つまり青雲紙となっているのです。ここから秋成の負けん気の強さや、和歌の教養の高さが伺えます。また、蘆庵との交流の深さも分かります。秋成は蘆庵の他にも多くの人と交流しており、多くの和歌を生み出しました。

俳諧という視点でも多くの作品を生み出しました。例えば、『俳調義論』では

擬柿園、梅翁、蕉翁三休

鶯の酔いともきくや梅の伽羅

梅やなぎのうのうあれに御たちある

あだし野や此孤屋に菊を売る

これら三首の俳諧は、それぞれ松永貞徳、西山宗因、松尾芭蕉の句に似せて詠まれています。それぞれの作風をよく生かした句となっています。秋成が俳諧の作品まで残していたことは私にとつて驚きでした。俳諧に関して一番印象に残ったのは彼の俳号についてです。俳号のひとつである「無腸」には蟹という意味があったのだそうです。天然痘の後遺症で短くなった指が蟹の鉗を連想させるから名乗ったとのことですが、蟹は外側は固いけれども内側はとても柔らかい生き物です。秋成は外面は人を寄せ付けない感じでしたが、内面は繊細な人物でした。そういった自身を俳号により例えている面もあるそうです。このように自身を例える秋成に何だか親近感が湧きました。

私が本講により一番印象に残ったのは『癩癬談』についてです。『癩癬談』とは『伊勢物語』をもじり、戯注を施した作品です。内容や行文のパロディも魅力的な作品ですが、当時の世相や人物に対する批評に眼目があります。最終段では自らを鼻持ちならぬ癖の持ち主だと自嘲しています。この作品には、秋成文藝の

特徴である笑いと毒、雅と俗の往還、「書く」ことに對する喜びと罪悪感のすべてを見ることが出来ます。この作品には秋成の人生に對する苦悩や喜び、彼の生きざまを見出すことができます。

これらの作品について学ぼうちに上田秋成という人物の魅力について様々な視点からより深く知ることが出来ました。

秋季公開講座を受けて

三回生 高 下 ちはる

今回の秋季公開講座では、上田秋成文藝の魅力とその特徴について駒澤大学の近衛典子先生にご講演いただいた。秋成は表現したいことに最も適した形で作品を書いており、今回の講義は小説、和歌、俳諧といったそれぞれの形で書かれた作品を取り上げ、その内容を見ていくものであった。私は特に印象に残った、『癩癧談』の例について挙げようと思う。

『癩癧談』とは、秋成が五十八歳頃、淡路庄村隠棲時代に成立した物語で『伊勢物語』をパロディ化したものである。『伊勢物語』二十三段は、「河内に通っていく女の所ができた男を妻は不快だと思う様子もなく送り出してやった。男は妻が他の男に浮気心があるから素直に送り出すのだと疑って、河内に行くふりをし庭の植木に隠れて妻の様子を窺った。すると女は美しく化粧し

ばんやりと男の行った方向を見ながら、男を思った和歌を詠んだ。これを聞いた男はこの上なく妻を愛しいと思って浮気をやめた。」という内容である。この部分は『癩癧談』上巻では、「妻の浮気を疑った男が厠に隠れて様子を窺った。すると、六十を超えた汚らしい男がやってきた。その男と贅沢三昧に過ごす妻の様子を見て、そうはさせまいと夫は浮気をやめた。」という内容になっている。内容や行文を秀逸にパロディ化し、笑いに転じていることが分かる。また、『癩癧談』は「かんぺきだん」とも「くせものがたり」とも読めるのだが、これは『伊勢物語』に『在中将物語』といった複数のタイトルが存在することに依るもので、そのような細かいところまでパロディ化されているのかと驚いた。

ここで、近衛先生は『癩癧談』の眼目はこれらのパロディではなく、当時の世相や人物に對する批評にあるとご指摘された。実は、『癩癧談』はモデル小説であり、登場人物にはそれぞれ明確にモデルとなる人物が存在していた。幕臣で村田春海門の国学者である小林歌城がそのモデルが誰なのかを欄外に書き留めている。知人間で回し読みされていて、読み手はモデルが誰を指すのかを完全に理解して読み、そこに面白さがあった。学問を踏まえながら遊んでいることが分かる。また、当時大阪騒壇といった宝

暦・明和期の大阪における独特の文化があった。雅と俗の往還、学問と遊びの両立といった特徴を持つ文化で、『癩癧談』にもこれらの特徴がみられる。墮落した世間を痛烈に指弾するが、最終段に至って自らも鼻持ちならぬ癖の持ち主であると自嘲するのである。秋成は心弱い人なのだと感じられた。

この場では『癩癧談』の例しか取り上げられなかったが、和歌や俳諧の例も大変興味深く面白い内容であった。近衛先生は秋成文藝の特徴として、笑いと毒、俗と雅の往還、「書く」ことに対する喜びの三点を挙げられた。複数の形の作品を見ることで、秋成作品の持つ多様性の面白さを知ることができ、それらの特徴を強く実感することができた。

【国文学会旅行の記】（十一月十二日）

上代文学、聖地巡礼の旅

一回生 仲 美 月

今回の国文学会旅行では、上代文学の聖地である、奈良に行きました。私は今回が初参加であったため、どのような旅になるのかと、わくわくした気持ちで集合場所の大和西大寺の駅に向かい

ました。

学会旅行の担当の方のお手製の「旅のしおり」をいただき、まずは平城宮跡に向かうことになりました。その道中では、私には何の変哲もないように見える川が、実は平城宮の水路を確保するために人工的にひかれたのだ、という解説を池原先生がしてくださいました。普段なら、見過ごしているであろう光景の中にも、隠された歴史があることに驚くとともに、とても関心を持ちました。

平城宮跡では、現地ガイドの方よりも詳しい先生方による解説を聞きながら、平城宮跡資料館を見学しました。資料館には当時の部屋を復元したものが展示されていましたが、シルクロードを渡ってきた絨毯であったり、官人が使用していた机であったり、現在と変わらないものも多くありました。また、第一次大極殿に登り、時の天皇が見ていたという景色を眺めました。遠くに見える朱雀門が奈良の山の下に映えていてとても美しかったです。この大極殿は当時のものと、ほとんど同じ大きさで復元されているということで、立派な造りに天皇の力を感じ、当時の人々に思いをはせました。

平城宮跡見学の後は、お昼を食べるために奈良町へ行きました。奈良町までのバスの中では、峯村先生や友達と地元のお話し

をして過ごしても楽しかったです。お昼時の奈良町は、日曜日ということもあり、大勢の人で賑わっていました。

お昼の後は、江富先生がお勧めされた、元興寺（現・がんごうじ）に行きました。このお寺の名前の当時の呼び方は何なのか、といかにも国文学科生らしい会話で盛り上がりしました。山中先生によると、「ぐわんごうじ」が正しいということでした。

元興寺から春日大社までは徒歩で行きましたが、その途中では悲恋伝説が伝わる猿沢池を見学しました。奈良時代、天皇からの寵愛が衰えたことを悲しんだ采女が身を投げたとされている猿沢池ですが、何がどのように転じたのか、現在では縁結びの神社として、若い女性に人気のスポットになっているそうです。

春日大社は緩やかな坂の参道を登った所に位置しており、定期的に紅葉は見られませんが、緑が深く、鹿ものんびりとすごしている様子が見られ、穏やかな雰囲気でした。また、春日大社は藤原氏縁のお寺で、社紋に藤が使われており、京都女子大学の校紋と似ていてかわいらしかったです。春日大社を参拝した後で、鹿に餌のおせんべいをあげました。

大きな鹿は少し怖かったです、毛並みが美しかったです。

最後になりましたが、お忙しい中引率してくださった、峯村先生、山中先生、面白い解説をしてくださった池原先生、このよう

な楽しい旅を計画してくださった学会旅行委員のお二方、本当にありがとうございました。とても有意義で楽しい時間を過ごすごとができました。国文学会旅行に参加して、本当に良かったです。

『女子大國文』 投稿規定

一、(投稿資格)

- ① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。
- ② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

二、(刊行回数・時期・投稿の締め切り)

- ① 毎年二回、九月と一月に刊行する。
- ② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする(厳守)。

三、(投稿の枚数)

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚(注・表・図版などを含む)を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする(多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可)。

四、(投稿に際して提出すべきもの)

- ① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部(審査用。二部ともコピーしたものでも可)。

- ② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたもの二部(審査用)と、投稿原稿が収められている電子データ(ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること)。

五、(投稿に際しての注意事項)

- ① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括って記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、(本学教授(本学大学院博士後期課程)(本学文学部国文学科四回生)などと記す。

- ② 連絡先の住所を記した別紙を添えること(採否の知らせや校正送付等のため)。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用す

ることはしない。

六、（投稿先）

投稿先は以下の通り。

〒六〇五―八五〇一 京都市東山区今熊野北日吉町三五番地

京都女子大学国文学会

『女子大國文』編集事務局

七、（投稿論文の採否）

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、（校正）

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

九、（本誌・抜き刷りの贈呈）

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、

採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務局まで連絡すること。

十、（掲載論文の著作権及び電子媒体による公開）

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作者は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ或いはその他のコンピュータネットワーク上で公開することがある。

十一、（規定の改正）

- ① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。
- ② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。

本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。

本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。

編集後記

今号の査読委員は次の方々です。

江富範子・峯村至津子

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会において査読の結果を報告、審議の結果一点が掲載となりました。また、近衛典子先生に公開講座での御講演内容を御寄稿賜りました。厚く御礼申し上げます。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。

(山中・池原)